

染香

ぜんこう

福泉寺寺報
令和3年4月
第94号
(毎月1日発行)

味のある
字と ほめられた
手のふるえ

掃除機を新しくして

春ですね。今年の桜は早めでした。ひと昔前は、学校の入学式に開花が間に合うかどうかだったような気がしますが、やはり温暖化の影響でしょうか。

さて、福山に縁をいただいていたから、共に歩んできた掃除機とお別れをしました。新しいのは、よく手伝ってくれる子どものために、軽めの物を選びました。

買ってみてビックリ、この掃除機がなんと「ライト」付きで、ホコリが良く見えるのです。廊下の隅など回りが暗い方が、さらによく見えるのです。これには感動しました。しかしまあ、ホコリというのは、一体どこからやってくるのかと思うほどによく集まってくるものですね。



さて、あるお寺の掲示板に
願にありて願を知らず
光に遇ひて願を知る

とありました。願は私たちの欲望、煩惱で、光は仏さまです。ライト付きの掃除機がホコリを照らす様子から、自分の思い上がりが仏さまによって明らかになるということを思い起こしたことです。

感謝の合掌、尊いです。
供養の読経、頭が下がります。

そしてそこに、「私とはいったいどんな存在なのか」を明らかにしていく、これこそが、長い歴史の中で受け継がれてきた仏教の肝要な所でありましょう。

最後に、親鸞聖人85歳ときに残された言葉です。

「凡夫というのは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむところ多くひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえず」

仏さまの前に座ると色々見えてくるかもしれません。いかかでしょう。(住職)

お経のことば折々



《恒河沙(ごうがしゃ)》

インドにはガンジス川があります。早朝のガンジスに行ったことがあります。ヒンズー、イスラムの人にとって聖地のようでした。さて、恒河沙とは「ガンジス川の砂ほどの数」という意味です。簡単に言えば、数えきれないほど沢山の、ということ。これがお経で引用されているときは、「仏さまの数」「命あるもの(私たち)の数」を表すときです。



ちょっとあたまのこりほぐし

= ⇒ め
+ ⇒ た
ル ⇒ ○○

(○○のなかにひらがなを入れましょう)

今月も分かりました。最近調子いいです

おてらから

今月号より、皆さまの思いを掲載させていただきます！

・本紙ワニ面の「**寺と青い**」欄です。

・このタイトルは『阿彌陀經』の言葉です。個々の価値観を尊重する、私の価値観を見つめ直す、そんな思いが込められてあります。(次号お願いに上がるかも知れません。)

境内に休憩場所を設置しました

・テラスと呼ぶには取ずかしいですが、お「寺」で息を「スウ」として、仏様の「照らす」光を感じてみてください。くだされば何よりです。

お晨朝 (朝のおとめ)

毎朝6時半〜

読経の時間は十五分程度です。

手ぶらで、思いつきで、気楽に、仏様の前に座ってみるのもいいですね。

初代若乃花と「正信偈」

東京 西方寺 西原 祐治

築地本願寺常例布教で、岡本信悟師（東京都八王子市 大恩寺）の法話がありました。話の中で、初代若乃花（のちの二子山親方）の話が出ていました。

若乃花が一九五六年九月場所前に、幼い息子がちゃんこの熱湯を浴びて死ぬという悲運に見舞われ、数珠を手に土俵入りして優勝したという話でした。ウィキペディア（電子辞書）には、次のようにあります。

大関だった昭和31年9月、4歳だった長男の勝雄くんが、ちゃんこ鍋の煮立った湯をかぶり全身大やけどで死亡した。

その10日後に初日を迎えた秋場所で若乃花は連日、大きな数珠を首から下げて場所入りし、12連勝。しかし12日目から高熱を発し、13日目から入院。それでも最後まで出場

を目指した。鬼気迫る姿が「土俵の鬼」という二つ名となった。



また都市開教の浄土真宗本願寺派 慈雲山龍溪寺 奏庵の寺報（2013年11月発行）に次のようにありました。

土俵の鬼とよばれた名横綱・初代・若乃花の幼い長男が、煮えたぎるちゃんこ鍋の中に転げ落ち、無残な死をとげるという事故がありました。悲嘆にくれる父親に代わって部屋の者が近くのお寺さんに依頼し仮通夜がはじまりましたが、そのお経を聞いていた若乃花が突然、「これはうちの お経じゃない」と言い出し、「うちの お経」はどんなお経かとたずねたところ「きみようむりようじゅによらい……」と、『正信偈』の始めの句を称えたことから、真宗のご門徒であったことがすぐにわかったという話を聞いたことがあります。きっと若乃花のご両親や、

おじいさんおばあさんが、お仏壇の前で朝な夕なに称えていた『正信偈』を聞いて育ち、いつの間にか身に染み込んでいたのでしょう。そして何より、我が子を先に送るといふ悲しみの中で、その子の往くところが、自分の親や先祖が先に往っておられるお浄土だということ、親心の切なる思いであったに違いありません。また、鹿児島別院の布教所の前に生家があったというフランキー塚が、朝夕布教所から聞こえてくる『正信偈』を聞いて育ち、門前の小僧よろしく、ジャズマンの耳のよさもあって、上手に、また楽しそうに『正信偈』を称えるのをテレビで観て、ほのぼのとしたこともありました。



九品仏浄真寺 (お寺様)

みなさんのリレー講話 青色 青光

この4月より、総代長を仰せつかった栗原直です。未熟ではありますが、任期期間、精一杯務めてまいります。どうぞよろしくお願いたします。

さて、ずいぶん前の新聞エッセイに、「残したい日本の音」として「朝のまな板の音」「新聞をめくる音」「仏間からのお鈴（りん）の音」が、また「残したい香り」として「味噌汁」「仏間の線香」が挙げられていました。

私は、段々と、亡き義父に代わって毎朝仏間で お勤めすることが日課になりました。頼み事というより自分のため、また折に触れて義父を背中中で感じながらの仏間での時間です。お鈴を鳴らして30分程度の読経ですが、あるとき同居の孫に感謝をされて驚きました。

また最近では、お勤めが終わって台所へ行くと、今度は妻が仏間の戸を開けました。曰く「お線香変えたの？いい香りね。リビングにももらいたくて」家族は普段、私のお勤めについて何も云いませんが、これらの言葉から、お勤めやお念仏を通しての幸せを感じています。同時に、私が我が家に残したい音、香りを確認した出来事でした。

